

なぜひとはファットマン課題では何もしないことを選ぶか

芝崎良典¹・芝崎美和²

Why Do So Many People Answer “Do Nothing” for the “Fat Man Problem”?

Yoshinori SHIBASAKI and Miwa SHIBASAKI

ABSTRACT

Why is the reaction different between the fatman problem and the trolley problem? In response to 186 college students, we presented the trolley problem and Fatman problem, asked what kind of action was appropriate, and classified the subjects to be studied from the reaction. We asked for an answer on why you made that decision. Whether there is a difference between the reasons for the use of Utilitarian judgment on the problem of the trolley and the person who made a mandatory judgment on the Fatman problem (Type B) and who made a mandatory judgment in any problem (Type D) This was investigated. As a result, for Type D, there is a mandatory theory that one life is not mild, and for type B, an emotional reason such as poor sacrifice was cited.

KEYWORDS : trolley problem, fat man problem, moral judgement

わたしたちは、どのような行為が道徳的によいのか、悪いのかを判断することができる。このような「よい」「悪い」に関する判断のことを特に道徳判断という。道徳判断に影響を与える要因のひとつに情動がある。情動が道徳判断に影響を与えているひとつの例として、トロッコ問題とファットマン課題に対する反応のちがいがあ（道徳判断の選好逆転現象）。以下、トロッコ問題とファットマン課題がどのような課題であるか説明する。その後、情動がどのように道徳判断に影響を与えるのかを説明する仮説について説明した後、本研究の目的を述べる。

トロッコ問題 道徳ジレンマの思考実験のひとつに、「トロッコ問題」(trolley problem) がある。Foot (1967) が提起した思考実験であり、Thompson (1985) などによって、分析が行われてきた。この課題の以下のとおりである。

線路を走っていたトロッコが暴走してしまう。こ

のまま暴走をゆるすと、前方で作業中の5人がトロッコに轢き殺されてしまう。この時、たまたま太郎さんは線路の分岐器のすぐ側にいた。太郎さんがトロッコの進路を切り替えれば5人を確実に助けることができる。しかし、その別路線でも二郎さんが1人で作業しており、5人の代わりに二郎さんがトロッコに轢かれて死んでしまう。太郎さんはトロッコを別路線に引き込むべきか。このトロッコ問題に対して、ひとは様々な反応をしめすが、大別すると、分岐器を操作しトロッコを別路線に引き込むことを選択する功利主義的な反応と、操作せずトロッコの進路を変えない義務論的な反応があるという（久保田, 2015）。

功利主義は結果を重視し、義務論は動機を重視する（久保田, 2015）。久保田（2015）によれば、功利主義はイギリスのベンサムによって唱えられたものであり、最大多数の最大幸福を道徳判断の原理とする考え方である。以下、久保田（2015）の説明

にそって、このベンサム功利主義について説明しよう。ベンサムによれば、ひとは快を求め、不快を避ける。私たちが何をし、何をしないかを決めるのは、この快と不快である。ある行為によって、あるひとの快を増大させることができるのであれば、その行為は道徳的によい行為といえる。一方、ある行為によって、そのひとの不快が増大するのであれば、その行為は道徳的に悪い行為といえる。できるだけ多くのひとの快を大きくする行為やできるだけ多くのひとの不快を小さくする行為は、最大多数の最大幸福を実現させる行為であるが、そのような行為を目指すことが個人あるいは社会にとって望ましい行為であるという。トロッコ問題に対して、分岐器を操作し、トロッコを別路線に引き込む選択をすることが、功利主義的な判断である。分岐器を操作するという行為によって、1名の命を犠牲にすることで、5名の命を救うことができる。犠牲になる命の数は、救われる命の数よりも少ない。できるだけ多くのひとの不快を小さくできたという意味で、功利主義的に言って分岐器を操作することは道徳的によい行為である。

分岐器を操作しないという判断もありうるが、これを義務論的な判断という。久保田（2015）によれば、義務論はカントによって唱えられたものである。久保田（2015）の説明にそって、義務論を説明しよう。義務論では、よい、悪いの判断は理性によって行われるべきものであると考える。ここでいう理性とは、先験的にひとにそなわっている、よいことをしようとする意志、実践理性をいう。行為それ自体がよいという理由で、その行為を行う。何かの目的のために、ある行為を選択することは適切ではない。ひとの命を奪うことは悪い行為であるから、たとえ、あるひとりのひとの命を救うことで、他の5名の命を救えるからと言って、分岐器を操作してはいけない。義務論では、このように分岐器を操作することは道徳的に悪い行為となる。

成人にトロッコ問題を提示し、分岐器を操作することが適切かどうか尋ねた場合、およそ9割程度の割合で適切であると回答することが知られている（相馬・都築, 2013）。

ファットマン課題 トロッコ課題と構造的には同一の課題にファットマン課題がある。歩道橋問題とも言われる課題であるが、次のような課題である。この課題では、分岐器の操作でトロッコの進路を変えるのではなく、ひとりの人間を線路に突き落とすことでトロッコの進路を変えることができるという設定になっている。具体的には次のよう設定である。線路を走っていたトロッコが暴走してしまう。このまま暴走をゆるすと、前方で作業中の5人がトロッコに轢き殺されてしまう。この時、たまたま歩道橋の上に太郎さんと二郎さんがいる。太郎さんが二郎さんを歩道橋の下に突き落とせば、トロッコの動きは止まり、5人を確実に助けることができる。太郎さんは二郎さんを突き落とすべきか。これがファットマン問題である。ファットマン問題も、ひとりを犠牲にすることで、5人の命を助けることができるという点で、トロッコ問題の状況とまったく同じ状況である。トロッコ問題では、9割のひとが1名の命を犠牲にすること、すなわち功利主義的な判断を適切としたのにもかかわらず、ファットマン課題では、9割のひとが二郎さんを突き落とすこと、すなわち義務論的な判断を不適切とすることがわかっている（相馬・都築, 2013）。

道徳判断の選好逆転現象 なぜ、トロッコ問題とファットマン問題では適切とされる道徳的判断が異なるのであろうか。この現象を道徳判断の選好逆転現象という（相馬・都築, 2013）。選好逆転現象が生じる原因として、情動という要因を挙げ、情動によって道徳的判断が影響を受けているという考え方がある。わたしたちが道徳的判断をするとき、論理的な推論のみをしているだけではなく、さまざまな情動も生じている。ネガティブな情動が強く生じているときに、義務論的な判断が優位になり、ネガティブな情動がそれほど強く生じていないときに、功利主義的な判断が優位になるという考え方がある（e.g., Valdeso and DeSteno, 2006）。Valdeso & DeSteno（2006）は、実験協力者の情動を操作し、情動が道徳的判断に及ぼす影響について検討している。Valdeso & DeSteno（2006）は、ファットマン問題を

提示する前に、ある群には楽しい気分になるコメディ番組を視聴させ、別の群には特に特定の情動を生じさせないドキュメンタリー番組を視聴させた。その後、ファットマン問題を提示し、5名の命を助けるために、1名の命を犠牲にしてよいか、一人の男を歩道橋から突き落としてもよいか尋ねた。結果、コメディ番組をみた群では、ドキュメンタリー番組をみた群に比べ、3倍の者が「突き落としてもよい」と回答することがわかった。コメディ番組を見ることで生じたポジティブな情動が、ファットマン問題によって喚起されるネガティブな情動を打ち消すはたらきをし、その結果、「突き落としてもよい」という功利主義的な判断を選択することをうながしたと、Valdeso & DeSteno (2006) は考察している。

ところで、義務論的な判断とは、アプリアリにわたしたちに備わっている実践理性によってなされる判断である。定義から言って、義務論的な判断は情動といった理性とは別の要因によっては影響を受けないはずである。ファットマン問題で義務論的判断をした者が、トロッコ問題で功利主義的な判断をしたならば、実践理性によって判断が行われたのではなく、理性とは別の要因、例えば情動のちがいによって判断を変えていることになる。そうであるならば、ファットマン問題で分岐器を操作しないとした判断は、義務論的判断とは言えず、それとは別の様式の判断であったことになる。

Table 1 「トロッコ問題」と「ファットマン問題」の反応の組み合わせ

タイプ	トロッコ問題	ファットマン問題
	分岐器	人
A	切り替える	突き落とす
B	〃	何もしない
C	何もしない	突き落とす
D	〃	何もしない

本研究の目的 ファットマン問題での「何もしない」という判断にはふたつのタイプがあると本研究では考えている。義務論的判断から「何もしない」ことを選ぶタイプと、それ以外の様式の判断から「何もしない」ことを選ぶタイプである。トロッコ問題とファットマン問題に対する答え方から、Table 1 のように4つのタイプにわけることができるが、義務論的な判断をしている可能性のある者は、4つのタイプのうち、Dタイプである。Dタイプに、なぜ「何をしない」ことを選んだのかと問えば、おそらく、「ひとを殺すことは悪いことであるから」であったり、「ひとの命に軽重はないから」といった義務論的な理由をあげるであろう。ファットマン問題で「何もしない」ことを選ぶのはDタイプのほか、Bタイプがある。Bタイプの「何もしない」という判断は、一見、義務論的な判断のようであるが、先述した理由から、義務論的判断とは言えない。Bタイプに、なぜ「何もしない」ことを選んだかと尋ねれば、おそらく、「突き落とされるひとがかわいそうだから」といった情動に基づいた理由があげられるであろう。本研究では、調査対象者に対して、トロッコ問題とファットマン問題を提示し、どのような行為を適切であるか判断を求め、その反応から、Table 1 のように調査対象者をタイプ分けする。なぜその判断をしたのか、その理由の回答を求め、特にBタイプとDタイプについて、その理由にちがいがあるかどうかを検討する。以上の議論から、本研究では、Dタイプでは義務論的な理由が挙げられ、Bタイプでは情動的な理由が挙げられるであろう。

方 法

調査対象者 大学生 186 名であった。

課 題 「トロッコ課題」、「ファットマン課題」の順に行った。

トロッコ問題 先述したとおりの問題文を提示し、続いて、「太郎さんはトロッコを別路線に引き込むべきか、それとも引き込むべきでないか、どちらだと考えますか」と問い、その理由を自由記述で求めた。

ファットマン問題 トロッコが暴走する箇所は「トロッコ問題」と同じであった。「このとき、太郎さんは線路上にある橋に立っており、太郎さんの横に三郎さんがいる。三郎さんはかなり体重があり、もし彼を線路上につき落として障害物にすればトロッコは確実に止まり5人は助かる。だがそうすると三郎さんがトロッコに轢かれて死ぬのも確実である。三郎さんは状況に気づいておらず自らは何も行動しないが、太郎さんに対し警戒もしていないので突き落とすのに失敗するおそれは無い。」に続いて、「太郎さんは三郎さんをつき落とすべきか、それともつき落とすべきでないか、どちらだと考えますか」と問い、その理由も自由記述で求めた。

倫理的配慮、説明と同意 調査対象者には書類を用いて口頭で研究の目的を伝え、研究に協力する協力しないは自由であり、たとえ、回答をはじめた後であっても、中止してもよいことを伝えた。個人情報の保護についても説明し、個人が特定されることのないことや得られたデータの保管期間（5年間）とその後の破棄について約束した。また本調査によって、調査対象者に不利益が生じることがないこと、仮に生じた場合には調査実施者及び学校長等に申し立てるよう伝えた。調査協力応諾をお願いした後、協力してもらえる場合は、所定の欄に性別と生年月日を記入したうえで、評定を開始するよう求めた。

結果と考察

本研究では、ファットマン問題での「何もしない」という判断にはふたつのタイプがあると考えた。

Table 2 タイプごとのファットマン課題での判断理由

タイプ	ファットマン課題での判断理由のタイプ			
	犯罪	選択	情動	その他
B	27	5	16	18
D	19	19	2	12

調査対象者にトロッコ問題とファットマン問題を提示し、その反応から、調査対象者をタイプ分けした。調査対象者にはそれぞれの問題についてなぜその判断をしたのか、その理由の回答を求め、Bタイプでは情動的な理由を挙げ、Dタイプでは義務論的な理由が挙げると仮説した。

トロッコ問題とファットマン問題の反応から、タイプ分けをしたところ、タイプAが10名、Bが66名、Cが2名、Dが52名であった。タイプAはトロッコ問題でもファットマン問題でも功利主義的判断をするタイプであるが、10名、全体の7%にすぎなかった。タイプCも非常に少数であり、全体の1%にすぎなかった。タイプBとタイプDで残りを二分している。

判断理由についてカテゴリ分けをしたところ、4タイプに分けることができた。「犯罪」は突き落とす行為が犯罪行為になるからというもの、「選択」は人の命に軽重はないからというもの、「情動」は突き落とされる人がかわいそう、突き落した結果、罪悪感をもつことが予想できるからというもの、「その他」は分類不可能というものである。Table 2のデータについてカイ二乗検定を行ったところ、有意水準に達した($\chi^2(3) = 20.27, p < .01$)。残差分析を行ったところ、タイプBの「選択」、すなわち人の命に軽重はないという理由は少なく、「情動」、すなわち突き落とされる人がかわいそうという理由が多かった。また、タイプDの「選択」は多く、「情動」は少なかった。予想されたとおり、タイプDでは義務論的な理由が挙げられ、タイプBでは情動的な理由が挙げられた。

ここで、ファットマン問題でタイプBの「何もしない」という判断はどのような道徳判断の様式なのかを考える。自ら選択した行為の理由に、情動を挙げていることから、義務論的な判断ではない。「何もしない」ことを選ぶのであるから、功利主義的な判断とも言えないように見える。しかし、功利主義の最大多数の最大幸福に、行為を選択しようとしている自らも含めて考える場合、タイプBの選択を功利主義的な判断と考えることができる。ミルの質的功利主義とは異なり、ベンサムの量的功利主義で

考えると、行為のよさの程度は関係するひとひとの幸福の総計に比例することになる（久保田，2015）。トロッコ問題を考えるとき、分岐器を操作することによって死ぬかもしれない男1名とほうっておくと間違いなく死んでしまう男たち5名の計6名の幸せ、不幸せの量が考慮されてどの行為を選ぶか判断すると考えられる。ファットマン課題のように「突き落とす」という直接的な行為が選択肢に入っている場合、6名の登場人物に加えて選択しようとしている自らの幸せ、不幸せを加えて判断を行うと考えることができる。「突き落とす」という後々非難される行為を選べば自分の不幸せは大きくなる。自らの不幸せの量が、死んでいく5名の不幸せの量よりも大きいと考える場合、功利主義な理由から、「何もしない」ことが適切であると判断される。このように自己の関与度の高いファットマン問題では、自らの幸せ、不幸せも考慮して最大幸福を考えるため、「何もしない」ことを選ぶのではないであろうか。タイプBは、利己的功利主義とでも言えるような道徳判断を行なっているといえよう。一方、タイプDは自己の幸福、不幸への重みづけが小さいために、安定して義務論的判断を行うと考えることができる。

今後の課題 タイプBでは、自分の幸せ、不幸せの量の重みづけが、他のひとの幸せ、不幸せへの重みづけよりもかなり大きい。そのために道徳判断の選好逆転現象が起きると本研究では考察した。自分を考慮するかしないかに影響を与える要因には、問題を与えられた際に喚起されるネガティブ情動の量がある（e.g., Valdesolo and DeSteno, 2006）。自分を考

慮する傾向のある者とそうでない者とをわけているのは、ネガティブ情動を生じる閾値のちがいであろうか、ネガティブ情動に対する耐性のちがいであろうか、それとも、そもそも、ある者はかなり利己的で、ある者はかなり利他的といったちがいにあるのであろうか。今後は、ネガティブ情動を生じる閾値、ネガティブ情動に対する耐性といった心的特性を要因にいれ、なぜ道徳判断の選好逆転現象が生じるのかを検討していく。

引用文献

- Foot, P. (1967). The problem of abortion and the doctrine of the double effect. *Oxford Review*, 5, 5-15.
- 相馬 正史・都築 誉史 (2013). 道徳ジレンマ課題における意思決定研究の動向 *Rikkyo Psychological Research* 55, 67-77.
- Thompson, J. J. (1985). The trolley problem. In J.M.Fischer & M. Ravizza (Eds.), *Ethics: Problems and Principles*. Fort Worth, TX: Harcourt Brace Jovanovich. 67-76.
- 久保田 進一 (2015). 義務論と功利主義について *哲学・人間学論叢* 6, 15-34.
- Valdesolo, P., & DeSteno, D. (2006). Manipulations of emotional context shape moral judgment. *Psychological Science*, 17, 476-477.

抄 録

本研究では、ファットマン問題での「何もしない」という判断にはふたつのタイプ、すなわち義務論的判断から「何もしない」ことを選ぶタイプと、それ以外の様式の判断から「何もしない」ことを選ぶタイプがあると考えた。大学生 186 名に対して、トロッコ問題とファットマン問題を提示し、どのような行為を適切であるか判断を求め、その反応から調査対象者をタイプ分けした。さらに、なぜその判断をしたのか、その理由の回答を求めた。トロッコ問題で功利主義的判断をし、ファットマン問題で義務論的判断をした者（タイプ B）といずれの問題でも義務論的判断をした者（タイプ D）について、その理由にちがいがあるかどうかを検討した。結果、タイプ D ではひとの命には軽重はないからといった義務論的な理由が挙げられ、タイプ B では犠牲となるひとがかわいそうだからといった情動的な理由が挙げられた。なぜタイプ B のような選好逆転現象が現れるのかを、利己的な功利主義的判断という概念から考察した。

キーワード：トロッコ問題、ファットマン課題、道徳判断